

開高健記念館訪問記

(もぐらもち 2008,4,10)

茅ヶ崎市にある『開高健記念館』を、2008,3,8(土)に訪れた。出張の帰路に何とか時間を作ってようやく訪問。一度訪れてみたいという長年の願いは、ようやくかなえられました。

開高健記念館：開高さん一家が他界されて後に、遺族が自宅を茅ヶ崎市に寄付して記念館とし、開高健記念会が運営。金・土・日のみ開館。入場無料。HP <http://kaiko.jp/kinenkan/>

1 ラチエン通り 南北に走る『ラチエン通り』(サザン・桑田の歌にありますな。通称として使われていたが、2001,2に、茅ヶ崎市が正式名称として認定)。右手の車の後ろの小道を右に行くと記念館、即ち開高さんの居宅。

2 開高記念館の門 右の表札には、開高健・牧羊子(奥様のペンネーム)。いかにも湘南という、瀟洒な佇まいでした。因みに、牧先生は、詩人にして料理の達人。料理随筆は、的確かつ、おもしろいで一っ。

1 ラチエン通り

2 開高記念館の門



3 作家の箴言の碑 玄関近くにある、直筆の箴言の碑:「入って来て人生と叫び、出て行って死と叫ぶ」。開高さんは、詩人または天性のコピーライターかもしれない。彼の武器は、深く鋭い言葉であった。

4 記念館入り口 右に小生も写っているが、作家と結構似ていることもあって、勿論カット。

5 展示室 実に良き雰囲気。引き出しには各種資料が展示されている。とても興味深い。案内役の男性も受付の女性も、とても親切であった。

3 作家の箴言の碑

4 記念館入り口

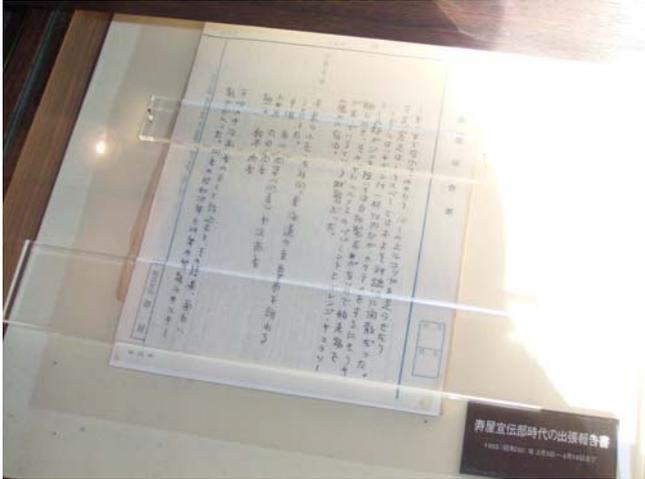
5 展示室



6 『出張の復命書』 作家・開高健が寿屋(今のサントリー)の社員として宣伝業務に携わっていた頃の『出張の復命書』。とても興味深いものでした。仕事はコピーライターだけではなく、雑誌(洋酒天国)の編集から何からいろいろと。

7 ベトナム従軍関係 ベトナム戦争を取材した際の品々。日の丸には、万が一に備えて日本語・ベトナム語で『記者である』ということが書かれている。右下のジッポは、作家が生涯手放さなかったもの。8,9 参照。

6 『出張の復命書』



7 ベトナム従軍関係



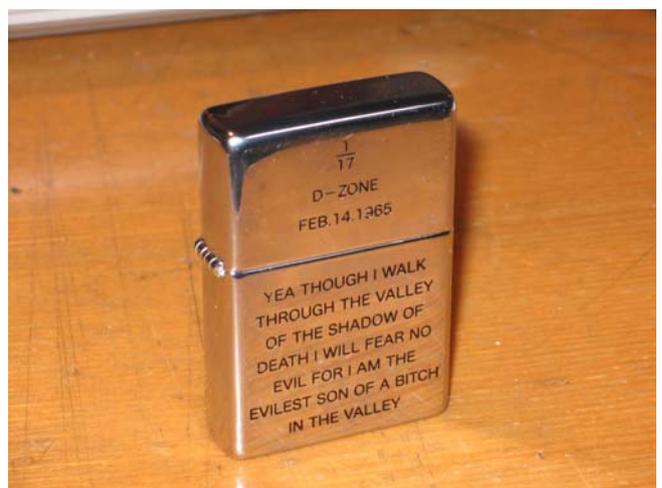
8 ジッポ片面 記念館の文から：「開高さんは、65年2月14日、ベトナムでの従軍取材中に200名の部隊がベトコンに包囲急襲され、僅か17名が生還するとの過酷な体験をしました。開高さんは、サイゴンの路地裏にあった彫り物屋でジッポに1/17と刻み、さらに弾除けの呪文を刻み込んでもらって、以後持ち歩きました。開高健メモリアルジッポは、遺された愛用のジッポをそのままに複製したものです。」

9 ジッポもう片面 記念館で販売されているジッポ。もちろん買ってきたもの。『1/17 D-ZONE Feb. 14, 1965』とある。1/17は、生還した17名の一人の意。D-ZONEは、従軍した危険地帯のこと。ジッポはごく普通のタイプです。しかし、蓋を開けてチンと音をたてると、作家が側にいるような気持にふとすることがあります。8,000円也。

8 ジッポ片面



9 ジッポもう片面



11 作家の部屋 生前のままにしてある由。右手には、釣りの道具などがあつた。世界中を釣り歩いた男。『男が人生で熱中できるのは危険と遊びだ。』奥地での釣りは、危険な遊び?かも!! 座って書く方は、すぐに寝られるし、飲んで潰れても安心・・・な一んちゃって。

12 東屋風の建物と庭 右手に進むと、作家が「哲学者の小径」と名づけた細い道が続く。

11 作家の部屋



12 東屋風の建物と庭

